

第 64 回情報処理学会全国大会 特別トラック「ヒューマンインタフェース」参加報告

白井良成 (日本電信電話株式会社 NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

2002 年 3 月 12 日～14 日の 3 日間に渡り、東京電機大学鳩山キャンパスにおいて第 64 回情報処理学会全国大会が開催された。今回、初の試みとしてヒューマンインタフェース研究会主催で「ヒューマンインタフェース」の特別トラックが企画され、3 日間を通し多くの人々が参加した。時間帯によっては席が足りないほどであり、また、参加者による議論も活発で盛況であった。会場ごとに、論文のコピーが置かれており、分厚い論文集を持ち歩かずにすむのも便利であった。

今回の特別トラックでは、

- 視線とジェスチャによるインタラクション
- ヒューマン-エージェント・コミュニケーション
- 『流れ』としての時間を扱う情報: 創出, 表現, インタラクション
- ヒューマンインタフェース一般

の 4 つのテーマの元計 47 件の発表があった。また、大阪大学の太坊郁夫先生と多摩美術大学の須永剛司先生による招待講演が行われた。太坊先生は、「マルチ・チャンネルの対人コミュニケーションの心理学」というタイトルで、対人コミュニケーションにおける性差や親密性平衡モデル、CMC の特徴などについての講演をされた。また、須永先生は、「活動を基盤とするデザイン activity based design」というタイトルで、Interaction 等の形の無いもの、働きに対して形や振る舞いを与える際の、現場での活動を基盤としたデザインの重要性などについて、実際の体験を織り込みながら講演された。マンインタフェースの研究領域は多くの研究領域と関連しているが、異なる研究領域の研究者とディスカッションをする機会は中々得難い。このような試みを是非今後とも続けてもらいたいと思う。特に心理学やデザインに関する今回の講演は、今回のテーマであるヒューマン・エージェント・コミュニケーションや時間の表現にも深く関連しており、参加された研究者も大変参考になったのではないだろうか。

視線とジェスチャのセッションではジェスチャを用いた入力手法やネットワークを介したコミュニケーションにおけるジェスチャ等の役割の評価などに関する 5 件の発表が行われた。SUAC の長嶋氏は、これまでに研究された多種多様な生体センサを使った電子楽器に関する紹介をされた。氏のホームページにはこれらのセンサシステムの回路図等が公開されているので、興味がある人は見に行かれると良いだろう。

ヒューマンエージェントコミュニケーションのセッションでは、コンテンツの流通や表現方法に関する研究、人間やエージェントの表情に関する研究、学習者の誤りからリフレクションを喚起するための表現方法など 17 件もの発表が行われた。そのうち実体を伴うロボットに関する研究が 7 件あり、注目度の高さが伺える。ロボットの持つ実体や行動が人間に対して与える影響はまだわからない点が多く、今後の研究が期待される。

『流れ』としての時間を扱う情報: 創出, 表現, インタラクションのセッションでは、音楽表現に関するもの、動きを利用した情報の視覚化、表現手法に関するもの、など 12 件の発表が行われ、筆者もこのセッションで発表させて頂いた。情報の多くは、時間と共にその意味が変化し、また、情報の種類によって変化の程度が異なるため、時間を活用した情報の表現、インタラクション方法は今後ますます重要になると考えられる。

一般のセッションには、筆者は残念ながら参加できなかったが、入力インタフェースや視覚化手法などに関する 13 件の発表が行われたようである。

全体として、突っ込んだ質問や、中には厳しい意見も飛び出し、非常に有意義な企画であったと思う。今回の特別トラックのプログラムは以下の URL を参照されたい。

<http://sighi.csrs.is.uec.ac.jp:8080/2002/64th-program.html>